

## 恋瀬川の底質分布について

三 上 靖 彦 (院・環境科学)

1981年8月6日から1週間にわたって行なわれた、「恋瀬川河口堆積環境調査」の調査結果を報告する。本調査の目的は、恋瀬川の河口に、どのような三角洲が発達しているか、その現状を捉えることである。

調査項目は、浅深測量と底質採取で、浅深測量には音響測深器を、底質採取には井口式採泥器を用いた。浅深測量の測点数は約550ヶ所、採泥は77ヶ所で行なった。

調査結果を第1図に示す。恋瀬川の水路を延長して滞すじが見られ、その両側には高まりが発達している。滞すじとこの高まりとの比高は、最大で60cmで、沖へ行くに従い比高は小さくなり、滞すじも不明瞭になってゆく。滞すじとその両側の高まりの沖には、勾配約3/1,000の斜面が見ら

れ、さらにその沖には、勾配約1/1,000の平坦面が見られる。

水路の部分の底質は、粗砂で、ときにはグラニューールもまじるが、それが滞すじになると、砂泥互層にかわる。この砂泥互層中の砂には、粗砂は含まれなかった。滞すじの両側の高まりでは、砂泥であった。水路前面の斜面とそのさらに沖側に発達している平坦面では、泥であった。

以上の調査結果から考察すると、滞すじに沿って発達している高まりは、三角洲の水中自然堤防で、その前面の斜面は、前置斜面、その沖の平坦面は底置面であると考えられる。そして、底質は、水路、滞すじ、水中自然堤防、前置斜面および底置面に対応して分布していることがわかった。

